二つの Freud museums

英語英米文学科　**田﨑　權一**

Sigmund Freud（1856-1939）は精神分析学の創始者として有名であり、「二十世紀の巨大な知的革命者の一人であることは、今日誰も疑うものはいない」（荒川, 1977）。彼の研究と生活の主な場所となった Wien（英語名 Vienna）と、最晩年に Nazi から逃れるために亡命した London には、それぞれに Freud museum が現存する。筆者は、2014 年 3 月中旬に Wien に、1997 年 12 下旬に London に、それぞれの Freud Museum を訪問する機会があったので、その経験を振り返りたい。Sigmund Freud の年譜は表 1 のように Wien の Freud Museum で閲覧できるが、これは観光客向けである（引用資料 2)、3）の文献巻末には詳細な年譜が掲載されている)。

Wien Universität から Freud Museum が位置する Berggasse 19 番までを歩くと、20 分か 30 分で辿り着いた。その Wien Universität から Berggasse までの途中に、Sigmund Freud 公園もある。

坂を下りきった付近にある Berggasse 19 番の Freud Museum の前には、道沿いに赤地に白抜き文字で「FREUD」（図 1 ）の看板がある。受付で今風の若い係員から案内用のトランシーバを借り展示室に入ると、正に引っ越し後の空室に、残されたメガネや小道具などの資料を展示したという印象であった。応接セットなどが陳列されているが（図 2)、Sigmund Freud が治療に使用した本物のカウチ（couch: 寝椅子）は展示されていない。London の Museum に比べると、資料室という印象が強く残った。朝日新聞の記事(資料 1、1999 年 2 月)によると、Wien の Freud Museum には「遺品はほとんどない。診察室のカウチ（長いす）は模型だし、フロイトが収集した古美術も、壁に写真が張ってあるだけだ。遺品はすべて、晩年を過ごしたロンドンのフロイト博物館に収められている」。1938 年に London へ亡命したことを報じた新聞記事など切抜き数十枚がボード一面にピン止めてあった。しかし、Museum の中庭の景色（図３）は、静けさや緊張感があり、思索するのに適した場所という雰囲気がある。高級住宅街に位置し中庭から空が広く見える London の Freud Museum とは全く異なる佇まいである。

Berggasse の印象は、Wien Universität に近いこともあり学生らしき若者が行き交

う中で、落ち着いた環境であった。Museum の反対側には路地を挟んで、書店が二軒、数十歩の間隔で営業していた。一方の書店は芸術など文系の内容の書物を扱い、他方は医学など理系の内容を扱っていた。理系と文系それぞれを扱う二つの書店が僅かな空間を隔てて存在するのが、バランスの良さや便利さを感じた。

また、Museum 中庭と Wien Universität の中庭には、枝振りが類似した落葉樹が共通して植えてあったのが印象的である。大学から自宅までの程よい距離・空間、雑念が入りようのない環境など、思索活動に好影響を及ぼすものと思われた。

Wien の Museum には遺品はほとんどないそうだ。「診察室のカウチ（長いす）は模型だし…、遺品はすべて、最晩年を過ごしたロンドンの博物館に収められている」。「当時の館長は『精神分析学はこの家で生まれたんですよ。なのに…』『ウィーンの精神分析学を取り巻く環境は、残念ながら一世紀前、フロイトの時代と同じですね。無関心か反発。米国では精神分析を受けるのに何の抵抗もない。オーストリア人は隠します』。記事掲載当時のウィーン精神分析協会会長は『一つは彼がユダヤ人だったからです』」。「ウィーンのユダヤ人差別は根強いものがあった。そんなとき、隣国ドイツにヒトラーが台頭する。オーストリアの精神分析医七十人は全員がユダヤ人で、うち六十八人が海外に逃れた。米国が一番多かった。創始者の国で、精神分析はとん挫した。…今もウィーン大学に精神分析学の講座はない」。S. Freud が 1910 年に国際精神分析学協会を設立した時から国外から注目されるようになったときも、「設立のとき、19 歳下のスイス人カール・ユングを会長にした。『先生が会長になるべきだ』という弟子たちに、『ユダヤ人の学問といわせないためだよ』とさとしている」。「フロイトの時代…ピアノの足がわいせつだと、ズボンをはかせていたほど」と、当時は道徳的に厳しい時代背景があったとよく言われてきた。「フロイトへの攻撃は、今もやむことがない。『人は自分の行動は自分の意思で選びとっていると思いたい。それにフロイトは『ノー』といった。それは人々を不安にさせた。人間に対する侮辱だと取る人もいるのです』」。「フロイトは毎朝七時に起き、冷たいシャワーを浴びた。八時には診察室に入る。診察は患者一人きっかり五十五分。五分休んで次の患者と会った。この日課は最後まで変わらなかった」（以上、資料 1）という。この診察時間の考え方は現在の心理療法でもほぼ継続さているように思われる。

他方、Johnston（1971）は次のように述べている。「フロイトがその無意識という概念を形成する際、ハプスブルク的官僚制の日常茶飯事から着想を得ている。礼儀

作法の諸規則は、学校やら事務所やらにその肖像が仰々しく掲げられている皇帝によって体現されていた。…＜中略＞…秘密めかした雰囲気が公的生活を覆い、あらゆる出来事の背景にひそんでいる意味の探索を促した。…流言は防衛機構としての作用をし、いかなる理由づけもできないことを無意識に説明させる準備をととのえたのである」（p. 31）。「どんな出来事も願望なり反感なりをかき立て、官公吏とのいかなる小衝突もごまかしに終わってしまう社会では、表裏の二重性を説明するのに抑圧された記憶の一地帯を仮定するのは、ごく自然なことであった。なにもオーストリアがよそよりも多くの神経症者を必然的に生み出したというのではないが、神経症のメカニズムをフロイトが発見するのに役立つような諸条件をオーストリアは育成していた」（p. 32）。

また、荒川（1977）によると、「かれが精神分析を創始する素地は、哲学や心理学あるいは文学であるよりも、医学によって与えられたことは、誰もが認めることである」（p. 19）、『フロイト以前には、情緒障害が純粋に心因性のものだと考えるものはいなかった』（p. 20）。フロイトの用語「『抵抗』や『抑圧』あるいは『置換』などの用語に端的にみられるように、熱力学的モデルに基づくものであったことは、しばしば指摘される」（p. 21）。当時の Wien は「…チェコ人、ポーランド人、マジャール人、クロアート人、南スラブ人などの少数民族のあいだでは、文化的な民族的使命を達成しようとする努力が高まっていた。こうしたすべての動きの接触点は古都ウィーンだった」（p. 24）。「表面の儀式ばった官僚制的重厚さと、その背後での耽美的ともいうべき耽美主義は、同じ文化の二面性であった」（p. 27）。

このように当時は、アンビヴァレントな二重性、いわゆる両面価値的な状況にあったとしている。

以上から、無意識の発見には、このような社会構造的な背景と同時に、天才的閃きの持ち主である S. Freud の出現が不可欠であったように思われる。

晩年は顎の癌で苦しめられ、「三十回を超すがんの手術で、体は衰えきっていた」（資料１）。そこへ 1938 年には「ある日、数人の突撃隊員がフロイトの家と知って押し入った。現金を持ち去ろうとしたところにやせ細ったフロイトが現れ、幽鬼のごとくにらみつけた。隊員たちは逃げ去った。ロンドンへの亡命を決意する」。フロイト年譜（表１）にあるように、同じ 1938 年、末娘 Anna Freud が秘密警察に連れて行かれ一日抑留されたことも London 亡命を S. Freud に決心させた出来事である。「ウィーンに残ったフロイトの妹四人はナチスのガス室で殺された」（資料１）。

表１．S. Freud 年譜

西暦	事　　項
1856	５月６日 S.Freud、現チェコ共和国の中部、Moravia、Freiberg 生まれ
1960	フロイド家、ウィーンに引越し
1873	大学無試験入学のための卒業証明書試験に Matura 合格し、ウィーン大学入学
1881	医師免許取得
1882-1883	Theodor Meynert 精神医学病院の医師に採用
1884-1885	coca の医学的薬効を研究
1886	Martha Bernays と結婚。1887-1895 の間に、Mathide, Martin, Oliver, Ernst, Sophie, Anna の６人の子ども誕生。Freud、神経科医開業
1887-1888	催眠術療法に関心
1891	Berggasse 19（Wien Freud museum 現住所：訳者注）に引越
1895	Josef Breuer と共著 *“Studies in Hysteria”*、自己の夢分析初成功
1886	用語 *“psychoanalysis”*「精神分析」初使用
1897	Freud 自身の自己分析開始
1899	*“The Interpretation of Dreanms”*「夢判断」初原稿 first copies、後に pre-dated 1900 年に
1901	Dora 18 歳の分析開始
1902	ウィーン大学教授就任、“The Wednesday Psychological Society”「心理学水曜日の会」創設
1905	*“Three Essays on the Theory of Sexuality, Jokes and their Relation to the Unconscious”* と *“Fragments of an Analysis of a Case of Hysteria (‘Dora’)”* 出版
1906	C.G.Jung が Freud と文通開始
1907	*“Delusion and Dream in W.Jensen's ,Gradiva”* 出版
1908	第１回 “Freudian Psychology”「フロイト派心理学会」Salzburg にて開催
1910	“The International Psychoanalytical Association”「国際精神分析学会」創設
1911	Alfred Adler、“Vienna PsychoanalyticSociety”「ウィーン精神分析学会」退会
1912	精神分析学術雑誌 *“Imago”* 発刊
1913	C.G.Jung と絶交状態に
1916	*“Introductory Lectures on Psychoanalysis”*「精神分析講義入門」第１部出版
1919	“The International Psychoanalytical Press”「国際精神分析出版」をウィーンに設立
1920	英文雑誌 *"International Journal of Psycho-Analysis"* 創刊
1923	*“The Ego and the Ido”* 出版 初期の喉頭がんの診断
1930	*“Civilization and its Discontent”* 出版
1933	*“Why War?”* 問題で Einstein と文通
1936	“British Royal Society of Medicine”（英国王立医師会）の名誉会員
1938	娘 Anna Freud が秘密国家警察（Gestapo）から尋問と１日拘置 Freud と家族は英国に移住
1939	９月 23 日、Freud、ロンドンにて死去

（Wien Freud Museum 閲覧資料：原文は英文）

London に移住した S. Freud は 83 歳で亡くなるまで London の現在の Freud Museum の所在地で過ごした。

図１　WienのFreud Museum入口

図２　WienのFreud Museum家具調度

図３　WienのFreud Museum中庭

ところで、Wien Universität は、Ringstraße に面し、筆者訪問時、丁度、オリエンテーション開催の垂れ幕が下がっていた（図４）。玄関の内側の入口ホールは天井が高く、右手に受付が、左手に著名学者の写真が展示してあった。入口ホール奥の研究室案内板では、発達心理学関連の単語は見つけたが、精神分析学のそれは見かけなかった。Wien Universität の中庭には Freud museum の中庭と同様に、三方向が建物で囲まれ類似した雰囲気だった。

図４　Wien Universität

17 年前に、London の Freud Museum を訪ねた。最寄りの駅の Kiosk で道順を尋ねると店外に出てきて教えてくれた。やや上り坂の道を歩いて目的地近くまで辿り着いたところで、ジャージ姿で散歩中の老紳士に尋ねると、高級住宅街にある博物館入口まで案内してくれた。約 10 分足らずで着き、受付ではユダヤ系民族衣装の男性が対応してくれた。S.Freud がカウンセリングで実際に使用したカウチや、末娘で忠実な後継者とされる A.Freud が実際に使用した織機などがロープ越しに陳列され、生活感が伝わってきた。しかし、今こうして思い出しながら想像するに、これらは、やはり Wien の Freud Meseum に置かれている方がしっくりとして、落ち着いておさまるように思われる。

Wien と London の２つの Freud Museum の両方を訪ねることができたのは幸運であった。沢山の文献等が保管されている筈だが、今回はともに個人的な短時間の訪問であり学術的なものではなかった。認知・教育心理学が専攻の筆者にとっては視野が広がる経験となった。一つの考えを堅持しさらに世界へと広めていくことは難しい。その後の精神分析学派の流れをみると、伝統を踏まえつつ、同時に並行して新しい考えが育っていったように思われる。存続のためには、伝統と革新が必要と思われる。

実は、３つ目の Freud Museum が Sigmund Freud の生誕地、現在のチェコの Pribor に存在する。インターネットでその建物などを見ることもできるが、実際に現地に足を運ぶことで様様な示唆を得るように思われる。

引用資料・文献

1）朝日新聞 1999 年（平成 11 年）2 月 28 日付（日曜版）記事

2）荒川　幾男（1977）．フロイトの思想的風土 現代思想　臨時増刊 総特集 フロイト **5**（6）

pp. 18-29.

3）Johnston, W. M.（1972）. *Freud and Vienna, in The Austrian Mind – An Intellectual and Social History 1848-1938*. University of California Press.（「フロイトとウィーン」生松　敬三（訳）（1977）．現代思想　臨時増刊　総特集 フロイト **5**（6）pp. 30-43.）